は壺飯扶持可被下事。但其所々時々の直段を以可被下候。以上。

江戸・京都御供之內御使に被遣時駄賃銀御定之事。

一、拾里に付而銀子一匁宛之事。

但、御歩之者主從二人、其外此並之御切米之者。

一、駄賃銀十里より內は被下間敷候。十里之外は此つもりを以可被下事。

右御在江戸・御在京御定之賄料之外に可被下候。然上は別に路銀者有之間敷事。以上。

右被仰出所如件。

寛永十四年二月十五日　　山城安房

一、江戸相詰候御鐵炮者・御小人、從公儀替被仰付候者、加州出之日より道十日、替之日より罷歸道中十日、上下十日宛御扶持方可被下旨、津田玄蕃を以被仰出也。

丑四月　　奉行　奥村主殿助　今枝民部

一九　切支丹宗門制禁之儀御定

條々

一、きりしたんの宗門雖爲御制禁、今以從彼國密々伴天連を指渡すに依而、今度かれら着岸之儀御停止之事。

一、領內浦々に常々隱成者を付置、不審有之船來るにおいては、入念可相改之。自然異國船逢風波之難令着岸者、早改船中之人數、不上陸地而、堅番を付置可注進之事。

一、不審成ものを舟にのせ來り、又は密々其船中之者を陸へ上登あらば可申出之。隨訴人之高下、急度御褒美可被下之。若以屬托於令相賴者、其約束一倍可被下事。

右條々所被仰出也。依執達如件。

寛永十六年七月廿三日　　對馬守　豐後守　伊豆守

右きりしたん宗門就御制禁、今度於江戸重而所被仰出也。分國中津々浦々奉行人至下々、相此旨常々改、或不審成船、或密々躰之者於有之者、急度可申顯。御下知如件。

寛永十六年七月廿九日　　筑前

二〇　國廻上使下國に付心得之儀御定

覺

一、吉利支丹宗旨之者、分領之內於有之者、とらへ指上候儀可爲御奉公事。

一、右宗旨就穿鑿、分領境關所などつよく相改め、往還之者不自由之旨。如有來往還無滯樣可有之。若吉利支丹宗旨御改之儀就有之者、一兩月日限を究關所など堅改、其外餘日可爲如常々事。

一、人返之儀、上下によらず他國に罷越、十年も十五年も有付、其所にて妻子をも持候者、國本之諸親類へつよく懸り召返候儀有間敷候。但、國人者可爲各別事。

一、諸事江戸如御法、儉約を可被用事。

一、來年國廻之上使可被遣候儀に被仰出候得者、行當り可被申候間、兼而仕置等爲可被得其意、唯今より被仰出事。

右條々、巳正月十日於御城御老中以上を以被仰出、重而公方樣出御被仰出之通可被得其意候。諸事如江戸御法可有沙汰之由御直之上意。其上御能被仰付所也。

寛永十八年五月十日

右翌日十一日より十三日に至而、前年より在江戸諸大名衆追々御暇被下也。

二一　火事之刻城中御定

定

一、御本丸　　定番衆　夜廻之外非番之御小姓衆　前田志摩守　奥村因幡守　當番之御馬廻替々一与

一、薪丸　　前田三左衛門与

一、二の丸之內新御殿　　長九郎左衛門　奥村河內　本多安房守　横山山城守　御馬廻替々一与

一、同二の丸

一、北の丸　　成瀨內藏助与